



2009年1月30日に本邦公開予定

## 「マンマ・ミーア！」

—ABBAと性革命を美化する作品—

評・テモテ・コール

「輝く地中海の波、岩場の多いギリシャの島々、白い砂浜、そして60年代の若者」とくれば、どんな物語が展開したかは想像できるでしょう。その前に、まず現在の場面設定から。

20歳のソフィ（アマンダ・セイフライド）は、母親の経営するホテルのあるギリシャの島で挙式の準備をしています。ところが、ソフィは父親に会ったことがありません。たまたま見つけた母親の昔の日記には、求めていた情報がありました。ソフィの生まれる9ヶ月前の夏に母親が関係を持った3人の男性の名前がそれ。「きつと顔を見れば分かる」と考えて、ソフィは3人を全員式に招待します。

3人が現れたので、母親ダナ（メリル・ストリープ）は当惑しますが、誰がソフィの父親なのかは分かりません。しかし心配は無用。3人の男たちは争うこともなく、ダナの古い友人もソフィの友だちも島の人々も、ABBAの奏でるビートに乗って太陽の下でパーティーを楽しみます。しかし頭を冷やして考えれば、本編にはとんでもない問題が山積みです。

第二に、「性革命」から40年経って、まだその誤りから学んでいない大人たち。ダナの二夏の火遊びが、何のダメージもなかったかのように描かれる。ソフィの父親が誰なのか分からないことさえも。もしもしたらプロデューサーは、「父親は、1人よりも3人いたほうが良い」とでも言ったかったのでしょうか。

映画の最後に、ソフィは結婚式も挙げ

ないまま母親に祝福されてボーイフレンドと旅に出ます。一方、老人たちははわが寄つて脂肪太りのしまりない体にも関わらず、遊ぶことには熱心です。若さゆえの行き過ぎも、後悔すべき失敗というより笑つて済ませる程度のものであります。

第二に、ABBAの覚えやすい歌詞の内容を、官能的性的に映像化しています（私も若い頃は、歌詞の意味を深く考えもせずによく聞いていました。中には目をそらせたくなる場面も出てきます。特に、2人の娘を連れて行ったので困りました。しかし、弱つたことに娘の世代はこの種の映画に問題を感じないのです。あまりにも性的なものが氾濫した社会で育っているため、これくらいは当然なのでしょう。

第三に、結婚を軽んじ、むしろ望ましくないものとして描かれています。結婚式など空騒ぎのチャンスとしかとらえません。ソフィが式を取りやめた時も、若いカップルがこれからどうするかより、ムダになつた準備をどうするかが問題なのです。同性愛、結婚前の乱交パーティー、泥酔シーンなども、普通のこととされています。

「ムダ」と言えば、私は支払った入場料のことを考えました。元ABBAファンとして本編に興味を

もつたものの、正直言つてイエスさまの隣りに座つて見られるようなものではありませんでした。娘たちに与えた悪影響も、どうやって取り返したらいいかさえ分かりません。映画に行く前に普通はネットなどで内容をチェックして行くのですが、今回はいくつかの予告編を見ただけで済んだ。この失敗を将来に生かしたいと思えます。

「マンマ・ミーア！」は、40年前と現在の「性の自由」を美化する一方、性感染症、中絶、心の痛み、家庭の崩壊、精神病、また自殺など、不徳な生活が行き着く先にある事実にはほとんどふれません。

ギリシャへの観光客は増え、ABBAのふところは潤うでしょうが、観客への悪影響は大きいと私は思います。



## 「マンマ・ミーア！」

監督◆フィリダ・ロイド  
主演◆アマンダ・セイフライド